



令和5年4月28日(金)
練馬区立開進第四小学校
校長 関川 健

開四小だより

5月号

「次は頑張ろうね」と「頑張ったね」

校長 関川 健

「子供は褒めた方が伸びる！」このことには基本的に異論がある方は少ないと思われます。では、叱るときはどうすればよいか？これは様々な考えがありそうです。近年、「子供の褒め方、叱り方が将来に影響する」と結論付けた研究成果が発表されました。これは、20歳以上70歳未満の2万人以上への調査を基に分析したもので、研究から得られた知見は以下のようなことです。

親に叱られたときに「次は頑張ろうね」と励まされたことを記憶している人は、「どうしてできないの」と叱られた人よりも、自己決定度と安心感が高かった。「罰を与える」ことは不安感を増すという意味で、良い結果を生まなかった。

*神戸大学、同志社大学の研究グループによる

薄々分かっていたような気がするのですが、敢えて研究成果として発表されたとなると、「う～ん、やっぱり。」と思います。私は教員として、子供たちになるべく褒めようというスタンスで接してきました。しかし、いざ我が子のこととなるとそうはいかなかったような気がします。保護者の皆様はどうですか？何かを失敗したりできなかつたりしても、我が子以外の子には「次は頑張ろうね。」と励ませるのになぜか我が子には厳しく当たってしまう・・・なんてことはありませんか。どうも人間は同じ1日後のことでも、「1年後とその翌日」より「今日と明日」の違いの方を重視しがちで、我が子に当てはめると、長期的な成長よりも直近の成長を求めてしまう傾向があるようです。親は、「これくらいは今すぐできてほしい」と期待してしまうのですが、この研究によると、できなかったとき、「どうしてできないの」と叱られるよりも、「次はがんばろうね」と励まされた記憶の方が成人後の生き方にプラスの影響を及ぼすことが分かります。

ちなみに、褒められ方にも違いがあって、「えらいね」よりも「頑張ったね」の方が将来の自己決定力と安心感が高まるそうです。後者は努力したことそのものを結果に関わらず価値付けた言葉だからだと思いました。「褒美を与える」ことは直近の効果はあっても、長期的な視点で物事を考える習慣や法令順守などの倫理的行動を低下させることとなり、「罰を与える」ことと同じ意味になってしまうようです。

親の子育てのタイプには「支援型」「厳格型」「迎合型」「放任型」「冷淡型」などがありますが、上記のような言葉かけをする「支援型」の親だと、子供は様々な場面で進む道を人に左右されずに自己決定し、自立心を養っていける。自己決定を積み重ねて成長した子供は、将来において高い幸福感をもち、プラス指向の人生を歩んでいけるようです。